

# ↑ オピニオン

# 生きる力を誘う訪問介護

新タマネギの季節になると、10年以上前に取材した静岡県の女性を思い出す。女性はこの季節に、59歳の息子を家で看取った。

口から食べられなくなり、胃に直接、チューブで栄養を入れるようになった息子に、女性は出回り始めた新タマネギで、みそ汁を作った。

汁だけを口に含ませて、「具は何だと思っ？」とクイズのように聞くと、息子は、「新タマネギ」と答えたという。

香り立つ新タマネギのみそ汁で、最期まで味わうことを楽しんだ息子と、先に逝く息子のために春を運んだ母親。家で逝く幸せが、強く印象に残った。

できる限り長く家で暮らすには、訪問診療や訪問看護と並び、訪問介護のサービスが欠かせない。だが、介護業界でもとりわけ人手が足りない。事業所の8割が訪問に携わる介護職の不足を訴えている。高齢化も顕著で、働き手の4割が60歳以上だ。

原因の一つに、働き手の収入の不安定さがある。短時間の訪問を複数箇所に行うために、空き時間が生じやすく非常勤雇用が多い。

佐藤好美

## 論多筆一

人の家が上がってケアをする抵抗感も指摘される。

だが、東京都大田区で介護事業所などを運営する「カラス」の田尻久美子さん(48)にとっては「それこそがやりがい」のようだ。IT企業勤務を経て、約20年前に介護業界に転身した。

父親を家で看取り、「家で死ねるっていい」と実感した。「家にいたい人が、最後まで家にいられる環境を作りたい」と、訪問を中心に事業を展開する。

なにしろ、その「訪問愛」が熱い。「人の家に入って、本人の身体から家の中まで全部みるサービス。生活を丸ごと支えるから、高い専門性がないとできない」と訴える。そろえた訪問サービスもいろいろだ。事前に決めたスケジュール通り赴く一般的な訪問介護ではない。

利用者の求め次第で、深夜も含む臨機応変な対応を、定期訪問とセットで提供するパッケージ型サービス(定期巡回・随時対応型訪問介護看護)もある。

1人暮らしで酒浸りの男性宅に入り、服薬の見守りや会話を通して生活リズムを立て直していく、なども

可能だ。「利用者の生活を点でなく面でみる面白さがある。生活全体を見極めてサービスを組み立てるのが腕の見せどころ」という。

介護以外に障害者や子供向けサービス、自費サービスもある。12種類の多様なサービスをそろえて、スタッフの働き方も変えた。

訪問介護の事業所は一般に、責任者だけが常勤でスタッフは非常勤というところも少なくない。だがカラスでは、訪問に携わる30人の半数が常勤雇用。しかも、8割以上が介護福祉士の資格を持つ専門職だ。

多様なサービスを組み合わせ、スタッフの待機時間を減らした。パッケージ型サービスの介護報酬が月額制であることも大きい。サービス範囲を大田区内に絞って、スタッフの移動を効率化した。

働き方の改善は、利用者の利便性にもかなう。常勤雇用が多いから、土日や夜間の訪問にも対応できる。

田尻さんは「訪問介護はときに、死ぬことを考えていた利用者の生きる力まで引き出す。スゴイ仕事なんですよ」とどこどこでも熱いのがあった。

(論説委員)